

中国人日语学习者连体助词「の」的偏误分析

--以「名词 1+の+名词 2」和「名词 1+名词 2」为中心

徐双飞

(湖南大学, 湖南省、长沙市, 410006)

摘要: 日语连体助词“の”是日语学习者最先接触到的日语助词之一, 贯穿整个日语学习及其使用过程。以汉语为母语的初级日语学习者到高级日语学习者, 在学习连体助词“の”的过程中存在着大量的误用。迄今关于连体助词“の”的误用研究主要集中在「形容词/形容动词/动词+の+名词」的过多使用, 如「*美しいの花」「*好きな人」「*買ったの本」。少有研究「名词 1+の+名词 2」(如: *大正の時代)和「名词 1+名词 2」(如: *日本語勉強)这样的结构中连体助词“の”的过多使用和过少使用。本研究利用『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』分别讨论了中国人日语学习者在「名词 1+の+名词 2」和「名词 1+名词 2」结构中“の”的误用及其原因。通过考察发现, 从名词 1 和名词 2 的语种组合的角度来看, 学习者的误用主要出现在「漢語+漢語」「漢語+和語」「和語+漢語」的语种组合中。最后, 关于“の”过多使用和过少使用的产出机制, 本论文认为引起误用的原因主要在于学习者对日语语法知识的认识不足以及受中文的语言习惯影响所致。

关键词: 连体助词“の”; 误用; 母语迁移

中图分类号: H0

文献标识码: A

1.はじめに

いわゆる連体助詞「の」は、使用頻度が助詞・助動詞の中で一番高いと、日本国立国語研究所(1964)¹⁾は報告している。標本数延べ 94,660 語の中で、11,527 語が「連体格」の「の」であり、助詞・助動詞の中での推定使用率は約 13 パーセントで第 1 位になっている。

日本語学習者にとって、助詞「の」は日本語学習において最も早く勉強する助詞の一つであり、日本語学習の誤用研究では、「の」の誤用は初級レベルから上級レベルに至るまで現れていることが証明されている。そして、その中で連体助詞「の」に関する誤用は主に「過剰使用」と「不使用」に集中している。

そこで、本研究では『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』を用いて、中国語を母語とする日本語学習者の「名词 1+の+名词 2」と「名词 1+名词 2」構文で見られる誤用を調査・分析し、誤用数および誤用の原因の 2 点を明らかにしていく。

2.先行研究

日本語の名詞修飾に見られる「の」の過剰使用と不使用は、日本語の習得過程における言語転移の様相を探る上で研究課題の一つとしてよく取り上げられている。これまでに外

1 国立国語研究所(1964)『現代雄誌九十種の用字用語』第 3 分冊[M]東京:秀英出版

国人日本語学習者における連体助詞「の」の誤用に関する研究は、主に迫田(1999)、張(2001)、松田・森・金村・後藤(2006)、奥野・金・羽渕(2010)、奥野・金(2010、2011)などがある。

迫田(1999)は、成人の英語・中国語・韓国語を母語とする日本語学習者 60 名分(初、中、上、超級:各 5 名分)の発話資料を分析し、「の」の過剰使用に関する横断研究を行った。その結果、中級ではどの母語話者にも「の」の過剰使用がみられるが、上級では他の母語話者に比べて中国語母語話者に「の」の過剰使用による誤用が多く、超級ではどの母語話者にも誤用が見られないことを報告し、レベルによって母語による違いが存在することを示した。松田・森・金村・後藤(2006)では、中国・韓国・モンゴル・マレーシア・タイ・ベトナム・カンボジアその 7 ヶ国の母語話者日本語学習者のデータを対象として、作文データから日本語の名詞句における「の」の誤用を考察し、「の」の不使用は漢語圏学習者に多くみられることが指摘されている。奥野・金(2010)では、「の」の不使用は母語にかかわらず生じる誤用だという結論を出し、またその要因として、学習者なりの「複合化」や、「置き換え」という言語処理のストラテジーが働いている可能性が伺えると指摘している。

上述のように、これまでの調査データは主に作文データ、会話データであり、コーパスを利用して「の」の誤用を研究したものは少ないである。また、中国人日本語学習者が連体助詞「の」に関する誤用実態を具体的に表明していない。そのため、先行研究から中国語母語話者の日本語学習者の「の」の誤用にどんな特徴があるのか、不明のままである。そのため、本研究は「『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』(縦断)を利用し、「名詞 1+の+名詞 2」と「名詞 1+名詞 2」の構成における「の」の不使用と過剰使用の要因を考察したい。

3. 研究方法

3.1 使用するデータ及び考察対象

本研究で使用するデータは、于康研究グループで、中国国内の大学 60 校から集めた中国語母語話者に限定する日本語学習者の作文を対象に誤用のデータ、添削やタグ付与などの作業を経て、正誤タグや文法研究用のタグを付与した大型日本語学習者 Concordancer である『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』²(以下『YUK コーパス』と略す)から抽出したものである。文体は、感想文、卒業論文、修士論文などにわたって類型が多種多様であり、テーマも言語学から文学、文化、経済などにわたって、幅広く、豊富である。それにより、本研究の考察対象は『YUK コーパス』から抽出した学習歴一年から四年までの連体助詞「の」の誤用における不使用と過剰使用に関する「名詞 1+の+名詞 2」と「名詞 1+名詞 2」構文である。抽出した誤用数は表 3.1 の通りである。誤用例を統計すると、誤用傾向が見られる。

² 具体的な情報は于康のホームページに見られる。(https://researchmap.jp/read0162642/works/36682770)

表 3.1 「名詞 1+の+名詞 2」と「名詞 1+名詞 2」構文に関する誤用数

	一年	二年	三年	四年	合計
不使用	146(12.58%)	219(18.86%)	125(10.77%)	671(57.80%)	1161(100.00%)
過剰使用	64(23.44%)	60(21.98%)	34(12.45%)	115(42.12%)	273(100.00%)
合計	210	279	159	786	1434

表 3.1 から分かるように、中国人日本語学習者の学習歴一年から四年まで、どの学習歴においても、中国語を母語とする日本語学習者の「の」の不使用と過剰使用は見られる。そして、「の」の不使用は過剰使用より何倍も多いことも明らかである。言い換えると、中国語母語話者の日本語学習者にとって、「名詞 1+の+名詞 2」と「名詞 1+名詞 2」の構文における「の」の不使用は過剰使用より生じやすいことが考えられる。

3.2 分析の手順

①まず、『YUK コーパス』から抽出した「名詞 1+の+名詞 2」と「名詞 1+名詞 2」に関する誤用例を対象とし、計量的な研究を行う。

②次に、誤用例が語種の組み合わせの角度から質的に分析する。

③最後に、上記の統計結果に基づいて、「の」の使用変化及び誤用の要因を分析する。

4. 統計結果及び分析

4.1 「名詞 1」と「名詞 2」の語種から分類したデータ

日本語の語種とは、単語を出自によって分けた種類である。宮島(1967)は、日本語の語種はその出自によって大きく 4 種類に分けることができると主張し、それは、和語・漢語・外来語、および、それらの混ざった混種語である。本研究においては、和語は漢語を含めない固有語とし、漢字で表記しても、訓読みをする場合は和語として扱うこととする。宮島(1967)によると、漢語は、主に以前中国から伝わって日本語になった語や、音読みで読むもの、字音を用いて日本で作られた語を指す。外来語とは、英語・ドイツ語・フランス語等、主としてヨーロッパ語から借用した西欧語系の単語で、カタカナで表記する語を意味する洋語である。

しかし、『YUK コーパス』から抽出したデータを分類する前に、データを調査した結果、混種語がなかったので、本研究で考察しないことにする。また、語種の組み合わせについては、和語・漢語・外来語の三つの語種だけからなる組み合わせを考えることにする。

まず、『YUK コーパス』から抽出した「名詞 1+の+名詞 2」と「名詞 1+名詞 2」の中における「名詞 1」と「名詞 2」の語種を判断し、そして「名詞 1+の+名詞 2」と「名詞 1+名詞 2」の語種の組み合わせを「漢語+漢語」³、「漢語+和語」、「漢語+外来語」、

3 本稿では「中日文化交流会」「中日交流センター」「中国大学生代表团」などの固有名詞を除いた。人名・地名・国名・会社名・学校名など、特定の人または機構をあらわす名詞を「固有名詞」と見る。

「和語＋漢語」、「和語＋和語」、「和語＋外来語」、「外来語＋漢語」、「外来語＋和語」、「外来語＋外来語」と分類した結果は表 4.1 の通りである。

表 4.1 学習歴別から見る各語種の不使用頻度

不使用	一年	二年	三年	四年
漢語＋漢語	41(28.08%)	91(41.55%)	52(41.60%)	519(77.35%)
漢語＋和語	29(19.86%)	32(14.61%)	21(16.80%)	34(5.07%)
漢語＋外来語	1(0.68%)	4(1.83%)	4(3.20%)	12(1.79%)
和語＋漢語	32(21.92%)	41(18.72%)	29(23.20%)	63(9.39%)
和語＋和語	32(21.92%)	28(12.79%)	8(6.40%)	22(3.28%)
和語＋外来語	4(2.74%)	8(3.65%)	2(1.60%)	1(0.15%)
外来語＋漢語	6(4.11%)	11(5.02%)	1(0.80%)	14(2.09%)
外来語＋和語	1(0.68%)	4(1.83%)	7(5.60%)	4(0.60%)
外来語＋外来語	0(0.00%)	0(0.00%)	1(0.80%)	2(0.30%)
合計	146(100.00%)	219(100.00%)	125(100.00%)	671(100.00%)

表 4.1 から分かるように、語種の組み合わせの角度からみると、学習歴にかかわらず、「漢語＋漢語」の誤用比率はすべての組み合わせの中で一番高く、「和語＋漢語」と「漢語＋和語」の誤用比率はそれぞれ 2 位と 3 位である。その上位の三つの分類の誤用は「漢語」と緊密に関連していることが分かる。そのうち、四年の学習歴においては、「漢語＋漢語」の誤用比率は 77.35%に達している。誤用比率の低い組み合わせは各学習歴に出ているが、「外来語＋〇〇語」、「〇〇語＋外来語」と「外来語＋外来語」の組み合わせに集中している。

学習歴別に見ると、「一年」の学習歴においては 1 %を超えていない組み合わせは「漢語＋外来語」と「外来語＋和語」である。「二年」の学習歴においては「漢語＋外来語」と「外来語＋和語」の比率は同じで、1.83%である。そして、「外来語＋外来語」の組み合わせの比率について、「一年」と「二年」の学習歴の場合では零である。「三年」の学習歴においては一番少ないのは「外来語＋漢語」と「外来語＋外来語」で、両方も 0.8%である。「四年」の学習歴では「和語＋外来語」、「外来語＋和語」と「外来語＋外来語」の比率は 1 %以下である。

表 4.2 学習歴別から見る各語種の過剰使用頻度

過剰使用	一年	二年	三年	四年
漢語＋漢語	38(59.38%)	32(53.33%)	16(47.06%)	93(80.87%)
漢語＋和語	9(14.06%)	7(11.67%)	4(11.76%)	6(5.22%)
漢語＋外来語	1(1.56%)	0(0.00%)	1(2.94%)	0(0.00%)
和語＋漢語	11(17.19%)	13(21.67%)	10(29.41%)	9(7.83%)

和語＋和語	4(6.25%)	7(11.67%)	1(2.94%)	3(2.61%)
和語＋外来語	0(0.00%)	1(1.67%)	2(5.88%)	0(0.00%)
外来語＋漢語	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	4(3.48%)
外来語＋和語	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)
外来語＋外来語	1(1.56%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)
合計	64(100.00%)	60(100.00%)	34(100.00%)	115(100.00%)

表 4.2 が語種の組み合わせの過剰使用の誤用実態を示した。語種の組み合わせの角度から各学習歴における「の」の過剰使用の誤用比率は両極化が見られ、上位「漢語＋漢語」、「和語＋漢語」、「漢語＋和語」という三つの組み合わせの誤用比率は極めて高いのに対して、他の組み合わせの誤用比率は比較的低かった。具体的に見ると、そのうち、「漢語＋漢語」の比率はどの学習歴においても一番高く、「四年」の場合では 80.87%に達し、「一年」、「二年」と「三年」の学習歴においては、比率はほぼ 50%ぐらいである。「漢語＋和語」の比率は「一年」から「三年」までほぼ 10%を超え、「四年」の場合では 5%ぐらいである。「和語＋漢語」の場合では、「一年」から「三年」までほぼ 15%を超え、「四年」の場合では 5%ぐらいである。他の組み合わせの誤用比率はどの学習歴においてもほぼ 5%以下となり、「二年」の「和語＋和語」は 10%ぐらいとなっている。つまり、どの学習歴においても、「の」の過剰使用が発生するが、よく発生する過剰使用の組み合わせは「漢語＋漢語」、「和語＋漢語」、「漢語＋和語」である。そして、誤用比率の低い組み合わせは各学習歴に出ているが、「外来語＋〇〇語」、「〇〇語＋外来語」と「外来語＋外来語」の組み合わせに集中している。前の表 4.1 と異なるのは、「外来語＋〇〇語」の組み合わせの場合では、ほとんど誤用が見られなく、「外来語＋外来語」という組み合わせの過剰使用は一年の学習歴においてしか出てなく、一回だけ出現したが、他の学習歴では零である。そして、「外来語＋漢語」という組み合わせの過剰使用は四年の学習歴においてしか出てなく、「四年」の 115 回の誤用例の中で 4 回しか占めていなく、他の学習歴では零である。「漢語＋外来語」と「和語＋外来語」の組み合わせの過剰使用は「一年」、「二年」の学習歴で出たが、出現頻度が低く、一、二回しか出ていない。

5.誤用例に関する考察

前節で「名詞 1+の+名詞 2」と「名詞 1+名詞 2」に関する「不使用」と「過剰使用」の誤用実態を語種の組み合わせから量的に考察した。本節では、前節で行った分析を通し、各学習歴における一番多い「漢語＋漢語」の誤用例に絞り、分析していき、「の」の誤用要因を考察する。

5.1 「漢語＋漢語」の組み合わせから見る不使用

表 5.1 不使用で引き起こした誤用例

学習歴	不使用の誤用例
1年-57	人生<○→の>価値を創造する方法はたくさんあります。
3年-118	岳飛は忠誠を尽くして国に報いることに興味しています。私は民族<○→の>英雄岳飛のように自分の力を尽くして、国のために貢献します。
4年-158	例えば、公共<○→の>場所で、中国では「空港内では禁煙する」、「博物館内での撮影は禁止する」などの公布がよく見られる。
4年-314	それにより、家庭<○→の>矛盾が減り、離婚率も減るだろう。

『YUK コーパス』から、「漢語＋漢語」に関するいくつかの誤用例を抽出し、表 5.1 のように提示した。具体的な誤用例を見ると、「公共<○→の>場所」「人生<○→の>価値」「家庭<○→の>矛盾」「民族<○→の>英雄」のように、「の」で接続すべきところでそれを省略した例が多い。では、中国語の場合、これらの例はどうなるのか、北京大学漢語語言学研究中心のコーパス（通称 CCL）⁴で、“的”を使用する場合と“的”を使用しない場合の出現頻度を調べ、以下のようにまとめられる。

表 5.2 中国語の“的”の有無と出現頻度

“的”の有無と出現頻度							
人生价值	704	人生的价值	194	民族英雄	727	民族的英雄	46
家庭矛盾	116	家庭的矛盾	16	公共场所	1802	公共的场所	1

その結果をまとめると、全体的に言えば、“的”を使用しない場合の出現頻度は“的”を使用する場合より、ずっと数が多いのである。つまり、中国語では「公共<○→の>場所」「人生<○→の>価値」などを表すとき、あまり“的”が使われなく、複合語のようにされるのが多いことが分かった。李明玉(1991)によると、日本語の「の」は修飾関係を表すが、中国語は孤立語体系に属するため、多くの場合、“的”を使用しなくても、問題がなく、文の意味に何の変化も起こさない。“的”を使うと、強調の役割を果たすということが指摘された。

そうすると、表 5.1 が示しているような誤用は日本語の「の」と中国語において名詞と名詞を接続する機能をもつ“的”とを同一のものと考えたために発生した誤用だと推測できるであろう。というのは、上記の表現を中国語で言い換えると、いずれも「公共场所」「人生価値」「家庭矛盾」「民族英雄」のように“的”が入らないことが多い。要するに、中国人日本語学習者は、漢字で表す日本語を使用するとき、中国語の言い方に影響されやすい。

このように、中国語では複合名詞のようなものを日本語の表現と同一のものと考えた

4 北京大学漢語語言学研究中心のコーパスはオンラインの検索画面から、現代中国語と古典中国語のコーパスでの用例を見ることができる。北京大学漢語語言学研究中心の Web サイトのメニューから「語料庫」を選ぶことで、コーパスのページに入る。現代中国語と古典中国語と合わせて 4 億 7700 万字と分量だけで言えば、かなり巨大なコーパスであり、中国語のコーパスとしては最大級であろう。

めに発生した誤用が存在することが認められる。複合名詞の問題には構成要素間の関係が強く影響している。したがって、複合名詞を構成する際には構成要素間の関係に注意する必要がある。そして、中国語の複合名詞における規則と、日本語における漢字語彙の複合名詞の規則は必ずしも一致するわけではない。したがって、それぞれの漢字語彙がどのような規則を持って複合名詞を形成しているかを常に意識し、確認していかなければならない。

表 5.3 複数の「の」が現れる誤用例

学習歴	複数の「の」が現れる誤用例
1 年-85	東京都は日本<○→の>政治の中心として、もっと多くの責任を負うべきだ。ほかの道府県の手本になる必要がある。
3 年-37	本司法がどうして日本司法になるかというテーマをめぐって、小説のような書き方で、第二次世界大戦後の日本<○→の>司法の変遷と裁判官の群像をいきいきと描いている。
4 年-34	現在中国国民収入の差は日増しに拡大しています。これも経済<○→の>発展の不安定要素のひとつだと思います。
4 年-61	今、中国の高齢化社会<○→の>問題は日本ほどそんなに深刻ではないですが、高齢者がだんだん多くなってくるのに伴って、さまざまな問題が
4 年-203	日本<○→の>主婦の就職状況が大きく変わっている。辞職して再就職にする主婦の人数は増加している。

さらに、表 5.3 が示したように、「日本<○→の>政治の中心」「第二次世界大戦後の日本<○→の>司法の変遷」「経済<○→の>発展の不安定要素のひとつ」「中国の高齢化社会<○→の>問題」「日本<○→の>主婦の就職状況」などのような「名詞+…+の+名詞」の構成では「の」で接続すべきところ以外に、複数の「の」が現れる。この複数の「の」が現れる構成は中国語の「名詞+的+…+的+名詞」の影響で発生した誤用であろう。

中国語の“名詞 1+的+名詞 2”構造がより大きな構造（名詞 2+的+名詞 3）に入る場合、名詞 1 と名詞 2 をより緊密に結合させるために、形式的に“的”を省略し、文の意味の階層をより明確にする。しかし、強調したいならば省略しなくてもよい。李(1991)によると、中国語の“的”を省略することで、“的”を使うことによる曖昧な文脈を避けることができる。例えば、「私の子供の絵本」は、この文の中で「私の／子供の絵本／」なのか、「私の子供の子の絵本／」なのかよくわからない。しかし、中国語では“的”を省略すれば曖昧さを克服することができる。例えば、「私の子供の絵本」を「我孩子的连环画」に訳し、一つの“的”省略すれば、意味が明らかになる。そのゆえ、中国語の影響で、“の”の不使用の誤用を生じることが考えられる。中国語では“名詞 1+的+名詞 2”の“的”が省略され、文の意味の階層がより明確された。そして、“的”を使用しない構成は直接に人類言語の経済原則で説明することができる。よく知られている言語表現ほど短い形式に傾いているということが、人間の言語の共通性だと考えられる。

要するに、中国語母語日本語学習者は複数の「の」を使うことに抵抗感を持つことから、一文の中に複数の「の」を出現させないために、「名詞 1 + 名詞 2」のような構造を使用しやすいのだと推論できる。しかし、すべての「名詞 1 + の + 名詞 2」の構成は、「名詞 1 + 名詞 2」のような構造にすることができないから、「の」の「不使用」という誤用が発生すると推察できる。

5.2 「漢語 + 漢語」の組み合わせから見る過剰使用

表 5.4 過剰使用で引き起こした誤用例

学習歴	過剰使用の誤用例
4 年-123	大正<の→○>時代、仏教系統が 12 の専門学校と大学を創立して、高等教育の領域へ入った。
4 年-190	日本<の→○>茶道の茶道具に見る日本人の美意識を分析した。
4 年-200	だから、日本は外国文明の優れたところを学んで徐々に自分の文化にしてきた。日本人が中国の漢字<の→○>文化を学ぶ時、まず理解してこそ応用できただろう。
4 年-223	第一次<の→○>世界大戦の時期、日本の家庭主婦の思想が以前より進歩した。

表 5.4 に示したように、「大正<の→○>時代」「日本<の→○>茶道」「漢字<の→○>文化」「第一次<の→○>世界大戦」のように「の」で接続しないところで「の」を使用した例が多い。

では、中国語の場合、これらの例はどうなるのか、CCL で、“的”を使用する場合と“的”を使用しない場合の出現頻度を調べ、以下のようにまとめられる。

表 5.5 中国語の“的”の有無と出現頻度

“的”の有無と出現頻度							
大正时代	3	大正的时代	0	日本茶道	45	日本的茶道	8
汉字文化	79	汉字的文化	2	第一次世界大战	1308	第一次的世界大战	0

以上の結果によると、「大正時代」「第一次世界大戦」などの誤用例は日本語でも、中国語でも固定された複合名詞であり、学習者がそれを意識していないため、「過剰使用」の誤用が発生してしまう。

また、山口拓朗⁵⁾によると、一文の中に「の」が連続して登場すると読みにくくなってしまふほか、読む人に稚拙な印象を与えてしまい、口語的な表現に近いためだと考えられるという。具体的な例を見ると、「*日本の茶道の茶道具」「*中国の漢字の文化」などでは「の」が二回以上も連続して使われているため、間延びした文章になり、過剰使用と判断された。しかしながら、「の」が二回以上も連続して使う場合では、何回目の「の」を省略すべきか、今後の研究課題である。

5 山口拓朗ライティングサロン <https://yamataku-salon.com> より。山口拓朗は大学卒業後 6 年間、出版社で雑誌記者を務めたのち、2002 年にフリーライターとして独立。「渋谷のクラブに集う 20 代の若者」から「老人ホームに集う 90 代のお年寄り」まで、23 年間で 3300 件以上の取材・執筆歴を誇る。執筆媒体は『日経おとなの OFF』『AsahiWeekly』『FLASH』など約 50 誌。

そして、袁(1995)は、“名词 1+的+名词 2”構造中の「の」は一般的に使用されなく、「名词 1+名词 2」の構造となる。“的”が使用された場合は名词 1 を強調する場合である。例えば、中国語で「木の部屋」を言うとき、一般に“木头房子”(名词 1+名词 2)と言い、“木头的房子”(名词 1+的+名词 2)と言うのは“木头”というものを強調するためである。そうすると、中国人日本語学習者は文を作るとき、あるものを強調すると思い、“的”の影響で、日本語の「の」を使い、「の」の過剰使用の誤用を生み出してしまったのではないかと考えられる。

6. おわりに

本研究は、中国語母語話者の日本語学習者の連体修飾構造における「名词 1+の+名词 2」と「名词 1+名词 2」の誤用：「不使用」と「過剰使用」を中心に、「の」の誤用メカニズムを解明した。先行研究を踏まえ、『YUK コーパス』から、日本語学習者における「名词 1+の+名词 2」と「名词 1+名词 2」という構造を抜き出し、語種の組み合わせの角度から誤用の種類、状況などを量的、かつ質的な角度から分析した。

そして、中国語母語話者の日本語学習者にとって、連体助詞「の」の使用は中国語の“的”の影響を受けている結論を出した。この誤用は、母語干渉による誤りである。

日本語と中国語には、複合名詞があるが、そのため、目標言語の構造そのものが母語と異なると学習が困難となる。既習の言語規則を未知の構造に適用しようとすると、「類推、過剰般化」の誤りが発生してしまう。

学習者にとっては、連体修飾構造における「の」の使用の可否基準は何であるか、いつ、どこで「の」の使用ができるかということは明確にされていなく、習得しにくいと考えられる。そのため、中国語を母語とする日本語学習者にとっては、このような誤用の産出は「の」と対応している“的”の悪影響だと指摘し、中国語の言語習慣からの影響だということである。そしてそれ以外は、日本語の文法規則の特性の影響も排除できないと言えるだろう。

参考文献

- [1] 奥津敬一郎.1973.「ボクハウナギダ」の文法[M]東京:くろしお出版
- [2] 于飛.2010.日本語助詞『の』と中国語助詞『的』の比較対照研究:連体修飾構造と用法[J]人文研究.大阪府立大学文学會 172,81-114.
- [3] 袁毓林. 1995. 谓词隐含及其句法后果[J]. 中国语文(4)
- [4] 奥野由紀子.2001.日本語学習者の「ノ」の過剰使用の要因に関する一考察—縦断的な発話調査に基づいて—[J]広島大学大学院教育学研究科紀要第二部.文化教育開発関連領域.50 号,187—195.
- [5] 奥野由紀子.2003.上級日本語学習者における言語転移の可能性—『の』の過剰使用に関する文法性判断テストに基づいて—[J]日本語教育』 116 号,79-88.
- [6] 奥野由紀子.2004.日本語学習者の『の』の過剰使用に見られる言語処理ストラテジー[J]横浜国立大学留学生センター紀要第 11 号,47-60.
- [7] 奥野由紀子.2005.第二言語習得過程における言語転移の研究[M]風間書房
- [8] 奥野由紀子・金立珠・羽測由子.2010.韓国人学習者の名詞句に関する支法性判断の特徴:「ノ」の脱落を中心に[J]韓国語日文学会 2010 年度冬季国際学術大会発表論文集 226-230.
- [9] 奥野由紀子・金立珠.2010.言語転移の双方向的検討—日本語の連体修飾構造の習得を中心に—[J]横浜国立大学留学生センター教育研究論集』 17 号,45-65.
- [10] 国立国語研究所.1951.現代語の助詞・助動詞—用法と実例—[M]東京:秀英出版
- [11] 国立国語研究所.1964.『現代雄誌九十種の用字用語』第 3 分冊[M]東京:秀英出版
- [12] 迫田久美子.1999.第二言語学習者による「ノ」の付加に関する誤用[J]第 2 言語としての日本語の習得に関する総合研究[J]327—334,科学研究費補助金研究成果報告書
- [13] 張麟声.2001.日本語教育のための誤用分析[M]スリーエーネット
- [14] 李明玉. 1991. 日语连体格助词‘の’和汉语结构助词‘的’的比较[J]. 日语学习与研究, (01):43-46.
- [15] 宮島 達夫 (1967) 「近代語彙の形成」『国立国語研究所論集 3 ことばの研究 3』
- [16] 松田真希子・森篤嗣・金村久美・後藤樹.2006.日本語学習者の名詞句の誤用と言語転移—アジア 7 カ国による日本語作文データに基づく分析—[J]留学生教育 11:45-53.

An Analysis on the Misuse of Modified Structure “no” among Chinese Learners of Japanese

--Centering on “noun 1 + no + noun 2” and “noun 1 + noun 2”

Xu Shuangfei

(Hunan University, Changsha /Hunan, 410006)

Abstract: The Japanese conjoined particle “no” is one of the first Japanese particles that Japanese learners come into contact with, and it runs through the whole process of Japanese learning and its use. There are a lot of misuses in the process of learning the conjoined particle “no” from beginner Japanese learners who are native speakers of Chinese to advanced Japanese learners. So far, the research on the misuse of the conjoined particle “no” has mainly focused on the excessive use of “adjective/adjective/verb+no+noun”, such as “*utukusii no hana”, “*sukina no hito”, “*katta no honn”. There are few studies on the excessive use of the conjoined particle “no” in the structure of “noun 1+no+noun 2” (eg: * daisei no zidai) and “noun 1+ noun 2” (eg: * nihonngo kyoushi). This article uses the corpus of “YUK Chinese native speakers of Japanese language learners corpus” to discuss the Misuse of Chinese Japanese learners in the structures of “noun 1 + no + noun 2” and “noun 1 + noun 2”. Through investigation, it is found that from the perspective of the language combination of Noun 1 and Noun 2, learners’ misuse mainly occurs in the language combination of “Chinese + Chinese”, “Chinese + Heyu”, and “Heyu + Chinese”. With regard to the production mechanism of “no” underused and overused, this paper argues that the cause of misuse is mainly due to the lack of understanding of Japanese grammar by learners and the influence of Chinese language habits.

Keywords: conjoined particle “no”; noun modification; misuse; first language transfer

作者简介（可选）:徐双飞，湖南大学外国语学院，硕士在读